

英語リテラシーのポリティクス

慶応大学・講演・大津研究室主催
2008年12月21日

佐藤 学(東京大学)



新学習指導要領の言語教育

- 「知識基盤社会」への対応＝「知識の活用能力 (competence＝PISA型学力)」＋「基礎的な知識・技能の教育」という二元論
- 「言語活動の充実」＝「言語に関する能力の育成」＋「知的活動の基盤としての言語の役割」＋「コミュニケーションや感情や情緒の基盤としての言語の役割」
- 小学校の英語教育



新学習指導要領の言語教育政策

「国語」＝「国語の能力」(話すこと、聞くこと、書くこと、読むこと)＋「言語文化」(日本文化の伝統としての「国語」の「尊重」)

- 「言語活動の充実」＝PISA型コンピテンス
- 「英語」＝「聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと」
＝「4技能を総合的に活用するコミュニケーション能力」と「その基礎となる文法」
- 「基礎的な知識技能」と「知識の活用能力」の二元論
- グローバリズム(新自由主義＝国際競争)とナショナリズム(新保守主義＝伝統文化)の二元論



新学習指導要領の言語政策

- 「言語活動の充実」＝「言語に関する能力の育成」
「知的活動の基礎としての言語の役割」
「コミュニケーションや感情や情緒の基礎としての言語の役割」
- この二つは「日本語」の教育を想定し、「外国語」(英語)は想定していない。



英語の言語政策(実用英語)

- 『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』(2003年 文部科学省)
 - 「コミュニケーション」19 話す・会話30
 - 「英検」「外部検定」14 「読む」5
 - 「文学」0

中学、高校までの英語教科の語彙数

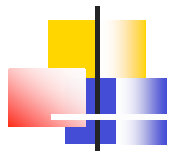
中学 1951年 2300 1998年 900

高校 1951年 6800 1999年 2700



新学習指導要領における「英語」

- 中学校＝「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の教育
- 「4技能を総合的に活用するコミュニケーション能力」と「その基礎となる文法」
- 高校＝「コミュニケーション英語基礎」「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」「コミュニケーション英語Ⅲ」「英語会話」「英語表現Ⅰ」「英語表現Ⅱ」



「言語(言葉)」不在の英語教育

- 学習指導要領において英語は「道具」「技能」として性格づけられている。
- 「聞くこと」「話すこと」は「音声指導」として位置付けられている。
- コミュニケーションも「技能」(能力)として性格づけられている。
- つまり「道具と技能」を習得すれば、英語の言語活動が可能であると考えられている。「人間＝機械」モデル



学習指導要領(国家の教育政策) の言語教育イデオロギー

- 言語観
言語＝道具＋技能(「道具技能イデオロギー」)
- 教育観
言語は学習者から独立して存在するものとされ、道具のように言語を獲得し、その道具を操作する技能を訓練することの教育が行われる。
「道具技能イデオロギー」の教育は、「国語」の教育よりも「英語」の教育、「英語」の教育よりも「日本語」の教育(外国人対象)で強力に作用している。



言語観の転換

- 言語(言葉)は<道具と技能>である前に<経験>である。言葉なしに経験は存在しないし、経験なしに言葉は存在しない。
 - 言葉は<意味の構成>であり<関係の構成>である。
 - 言葉は<絆>であり<関係>である。
- 言葉は、モノ、ことと行為を結びつけ、行為と意味を結びつけ、人と人を結びつける。



言語(言葉)不在の英語教育

- 忌まわしき被教育体験(二つの教科書)
「This is a pen.」(New Prince Readers)
(相手は盲目か?)
「I am a boy.」(Jack and Betty)
(私はオカマか?)
a cup of coffee (?)
Please open the door. (これって依頼?)
Excuse me, do you know ---? (非礼)



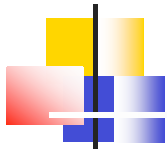
英語＝道具技能の教育は どこから生まれたのか。

- 岡倉由三郎の英語教育の歴史的位相
(台湾、韓国、日本)における日本語教育と
英語教育
- 第一期「国定国語教科書」(1904)
＝「イエ・スシ」教科書
- 日本の言語教育政策の根幹に「植民地主
義(colonialism)」のイデオロギーがある。
- このイデオロギーは、国語教育、英語教育、
日本語教育を貫いて構造化。



翻訳可能性と不可能性

- 英語教育の根幹に、英語と日本語は翻訳可
能という前提がある。(だから、<道具技能>
の教育が成立する。)
- 英語教育における二段階訳読法の成立は何
を意味しているか。(一方向の翻訳体系による
国際化、他者と出会わない「異文化理解」)
- 「生きた言葉」(翻訳不能な言語)として外国語
を体験することの意味。



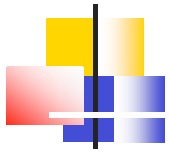
リテラシー概念からの視座

- 英語教育は言語リテラシーの教育であるという視座からの検討。
- リテラシーは、口承(oral)文化に対する書字文化である。(最も広義の概念)
- リテラシー概念の歴史
literate : 14C=ラテン語から英語へ
literate の語義=「高度の優雅な教養、博覧強記」「あらゆる文献の知識に精通していること」(F. Bacon、17C)
literature =「人文主義の教養」から「文学」へ(19C)
literacyは教育概念=1850年代に登場=公教育の「共通教養」の意味(「公共的教養」)=現在は「機能的リテラシー」(functional literacy)=市民として自立し社会参加する基礎となる教養



リテラシーは「読み書き能力」 (識字能力)なのか？

- Literacy =「識字能力」という用法は、1956年にユネスコの開発教育プログラム(識字教育)において登場。
- したがって「リテラシー=読み書き能力」「リテラシー=識字能力」という理解は妥当とは言えない。「リテラシー」は書字文化による「共通教養」であり「公共的教養」である。
- 英語教育を「英語リテラシー」の教育として再定義することはできないか。



リテラシー教育の 三つのアプローチ

- ① 道具技能アプローチ(行動科学)
言語＝ツール、言語活動＝技能
価値中立主義＝情報処理モデル
- ② 相互作用アプローチ(構成主義)
言語＝意味のネットワーク＝歴史文化
学習＝学習者と文化財の相互作用
「文化的リテラシー」(E.D. Hirsh)＝普遍主義の教養
- ③ 再生産アプローチ(批判哲学)
言語＝階級・階層の再生産の道具(象徴権力)＝批判的
リテラシーの教育
- 新たなアプローチの可能性は？

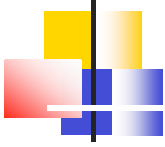


「道具技能イデオロギー」の展開

言語教育の道具イデオロギーは三つの歴史的段階によって教育に浸透した。

- ① 第一期国定教科書(1904年)「イエ・スシ」教科書
(内地植民地化)の様式
- ② 1910年以降の行動主義心理学
- ③ 戦後の言語政策と言語教育における「中立主義」
と機械的言語観(実用主義の英語教育)

そして現在、グローバリゼーションのもとで、
「道具技能イデオロギー」の言語教育は再生産されている。



「英語リテラシー教育」の可能性 (英語教育の3つの目的)

- 「言葉(言語経験)」の教育としての英語教育。もう一つの言語世界を自分の中に築くことの重要性。(日本語の基盤として)
- 多文化共生社会、グローバル社会における市民的教養としての英語教育。
- 異文化体験、異文化理解の方法としての英語教育。



結論＝実践的・理論的方略へ

- 「言語リテラシー」としての英語教育＝国語と英語を一つの教科「言語」に統合できないか。あるいは、その枠組みの実践を創造できないか。
- 「市民的教養」としての「英語リテラシー」教育推進のための実践方策。
＜テキストづくり＞＜実践交流＞
＜言語リテラシー言語教育の学習理論の構築＞